日本映画が規制ばかりの〝大作主義〟に流れ、無味乾燥してゆくことに反発し、〝映画館は映画だ〟を合言葉に新しく発足したシネマ・プラセットは、半円球ドームの特設映画館を設定することにより製作・配給・興行という全てを一環させ、映画界の一角への切り込みを果した。

そして、その第一弾となったのが娯楽映画の最高峰とまで言われる鈴木清順監督によるこの『ツィゴイネルワイゼン』である。

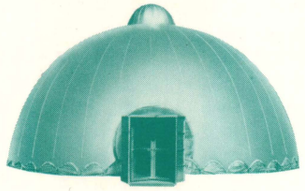
「今度の映画は、生きている人間は本当は死んでいて、死んでる人が本当は生きてるんだ、という一種の怪談ですね。情念や因縁は何ひとつない、現代風の、ノッペラボーな怪談を、やさしく、面白く、極彩色の娯楽映画に仕上げてみるつもりなんです」（演出の言葉＝鈴木清順）

鈴木清順の〝怪談〟は、大正ニヒリズムの影を残した昭和初期を舞台に、作曲家のパブロ・デ・サラサーテが自ら演奏、録音中に、今も解けぬ謎の言葉を口走ったといわれる、伝説の、一九〇四年盤『ツィゴイネルワイゼン』から始まる。

脚本は、人間の深部に秘む魔性を描いて、並ぶ者のない、現代の語り部・田中陽造。撮影は、あの『殺しの烙印』以来、実に十三年ぶりにコンビ復活の、名手・永塚一栄。

そして美術は、日本を代表する映画美術のベテランであり、数多くの清順映画を手がけた木村威夫と多田佳人。スチールに荒木経惟、宣伝美術が木村恒久という、異色、そして話題のつきない、豪華スタッフである。

出演は『悲愁物語』で、念願の清順映画主演を果した原田芳雄が、漂泊のドイツ語学者中砂役、その妻園と芸者小稲の二役に大谷直子。中砂の学生時代からの友人、青地に、映画監督の藤田敏八が扮して熱演。その妻周子に、安田道代改め大楠道代が久々の映画出演、大スター健在ぶりを示す。そして周子の妹妙子に真喜志きさ子、他、樹木希林、佐々木すみ江、麿赤児、山谷初男、玉川伊佐男などのベテラン、異色俳優が、鈴木清順のメガホンの下で、いきいきと活躍する。



特別観賞券1100円発売中！

（一般1400円・学生1200円のところ）

昭和56年1月31日公開

有楽町
日劇地階

日劇文化

（201）
2214

アート 4

Zigeunerweisen

ツィゴイネルワイゼン

鈴木清順監督作品

生きているひとは死んでいて、
死んだひとこそ生きているような
むかし、
男の傍には
そこはかとない女の匂いがあった。
男にはいろ気があった。

◉鈴木清順◉

大正12年東京生れ。弘前高等学校を卒業後、鎌倉アカデミア映画科を経て松竹大船入り。昭和30年に日活へ移籍し、31年『港の乾杯・勝利をわが手に』でデビュー。以後、いわゆる“添えもの映画”を多く手がけ、赤木圭一郎、和田浩治、宍戸錠ら主演のアクション映画で次第に自己のスタイルを確立。『野獣の青春』『関東無宿』『肉体の門』『東京流れ者』『けんかえれじい』等の代表作がある。「白い障子が倒れて赤い世界になって、それから幕が落ちて黒い空間の中に真白い雪が降る」という色にこだわる清順美学は、熱狂的なファンを作り出している。

ごあいさつ

富士には月見草がよく似合う。芸術には映画がよく似合う。可憐な似合い方である。月見草はむしり取る事も出来るが、富士をむしり取る事は出来ない。私の映画はすんなり咲いた例がない。何時も踏みしだかれた月見草である。それが富士と似合うとは誰も云わないだろう。何処に咲いても月見草は月見草で糞だめの傍に咲く月見草だってある。

みんな自然の理のなかにある。理がまわって来、「ツィゴイネルワイゼン」の撮影にかかった。

シナリオは上出来だ、が、映画はシナリオくずしから始まるものだから、良すぎるシナリオは始末に負えぬ。俳優は当代一流が集まった、が，役づくりのイメージが豊富だから一流は手に負えぬ。頼みはスタッフだが、これが千軍万馬だから言葉に詰る。嗚呼、と云って海岸に出ると富士がある。

疲れ切って肩が凝り風邪を引き精神は困憊する。

初めての鎌倉合宿は快適である。初めてのロケ、セットはなるようにしかならぬ処が性に合って面白い。みんなが映画のことを考え過ぎるものだから抜けたところがあっちこっち噴き出して，これが一瞬の仕掛花火とごらん戴ければ幸いである。

「ツィゴイネルワイゼン」は富士を知らない月見草である。

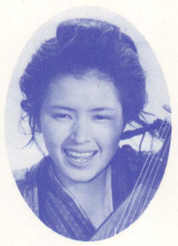
映画に見る「風景」の表と裏・「影武者」と対照的に「風景」が抜群に生きているのが鈴木清順監督の新作「ツィゴイネルワイゼン」だ。昭和初期を舞台に男女四人が織りなすこの“極彩色ミステリー”では、たとえば河にかかったいまにも朽ち果てそうな木の橋、ほとんど列車の通らない山間の鉄道、切り通しのむこうにある古い日本家屋、といった“見捨てられた風景”がカメラで丹念に拾い上げられる。どの風景も決して美しくはない。主演の一人、大楠道代(好演)のセリフに「水蜜桃は腐りかけている時が美しい」というのがあったが、それに倣えばこの映画の「風景」は「腐りかけて美しい」。(5 /17朝日新聞)

“映画は夢”生々しく必見の傑作・いっさいの出来事は登場人物の妄(もう)想、とくに青地の病身の妹(真喜志きさ子＝新人)の幻覚なのかもしれない。そう思ったとたん、しかし、この映画のあまりのなまなましさに、ぞっとする。数多くの死人、骨のイメージの反復が、血肉をそなえて生きる人間の悲しみをにじみ出し、単純に妄想・幻覚とみなしてすますわけには、いかないのだ。いうまでもなく、映画というものは一つの夢の形である。そのことを、これほど奇々怪々かつなまなましく体現した作品は、ここ数年なかった。映画ファン必見の傑作といっていい。
(4 /14サンケイ新聞)

衝撃とユーモアの大逆転・日本映画が、これまで余り取り組もうとしなかった領域の映画が現れた。サラサーテの肉声がはいっている「ツィゴイネルワイゼン」のＳＰレコードが象徴的に使われているところは内田百閒の小説がヒントだそうだが、文学の方でいえば、今昔物語から上田秋成や小泉八雲、さらに夢野久作や石川淳が描いてきたような世界に，まともに触れた映画である。
(4 /14読売新聞)

最近見た映画の中から・黒沢さんの〈影武者〉は、よく部分部分の色彩感覚が美しいといわれているようですが、そういう意味での色彩感覚や、映像の構図のおもしろさということでは、〈ツィゴイネルワイゼン〉のほうが格段に上ですね。演技ということでは、やはり大楠道代（安田道代）はとてもよかったし、藤田敏八もよかったと思う。大谷直子がこれほど魅力的に見える映画をぼくは他にも知らないし、他にも樹木希林とか、原田芳雄、山谷初男なんかが好演していましたね。ぜひもう一度見たいと思っています。
五木寛之氏(6 / 7日刊ゲンダイ)

◉玉寄長政

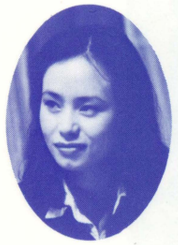


◉木村有希

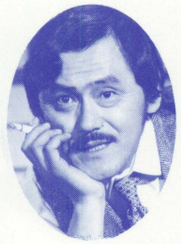
◉麿　赤児

◉山谷初男

◉樹木希林



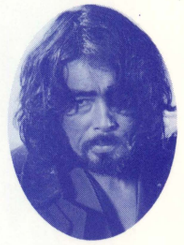
◉真喜志きさ子



◉藤田敏八

◉大楠道代

◉大谷直子



◉原田芳雄

キャスト

原田芳雄
大谷直子（二役）
真喜志きさ子（新人）
麿赤児
樹木希林
木村有希
玉寄長政
佐々木すみ江
夢村四郎
米倉ゆき
江の島るびひかる
紅沢ひかる
渡辺忠臣
間崇史
小田美知
中沢青六
内山信子
堀妙子
石井まさみ
川平京子
山谷初男
相倉久人
玉川伊佐男
大楠道代
藤田敏八

スタッフ

監督　鈴木清順
企画　伊東謙二
脚本　田中陽造
撮影　永塚一栄
照明　大西美津男
美術　木村威夫
　　多田佳久
宣伝美術　荒木恒惟
スチール　木村経
音楽　河内紀
録音　岩田広一
編集　神谷信武
制作主任　小田知雄
助監督　山田純生
装飾　神田明良
記録　内田絢子
演出助手　花田良知
　　酒井直人
撮影助手　渡辺孝好
　　志賀葉一
照明助手　藤沢順一
　　鈴木修豊
　　杉野昭伸
　　宇佐美州師
　　大塚豪彦
　　田村雅彦
美術助手　小間豊
　　小桜繁
　　高橋徹夫
小道具　中島竹彦
　　宮下真
車輌　塩谷真三男
　　星野成吾
制作進行　平松正之
衣裳　富士衣裳
　　福島源治
技髪　松川好伸
　　かつら工藤
メーキップ　丸山澄江
　　大庭礼子
現像　宮崎明実
スタジオ　東洋現像所
撮影機器　映広音響
照明機材　フカザワ
　　日本照明
制作事務　宗像栄子
プロデューサー　伊藤友理子
　　荒戸源次郎